

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 六 第 卷 八 十 二 第

行 發 日 一 月 六 年 四 和 昭

論 叢

戸數割の性質

法學博士 神戸 正雄

勞銀の理論

文學博士 高田 保馬

マルサスの恐慌論

經濟學士 谷口 吉彦

說 苑

近江商人の活躍について

經濟學士 菅野和太郎

兩圓との關係に就て

經濟學士 堀江 保藏

雜 錄

免償價值について

文學博士 高田 保馬

生産立地理論について

經濟學士 菊田 太郎

中央と地方の豫算形式

經濟學士 中川與之助

國民經濟と大都市經濟

經濟學士 大谷 政敬

大阪市の人口動態

經濟學士 武田長太郎

佛蘭西國營輸出信用保險

經濟學士 近藤 文二

法 令

杜謾法・農業調査令

附 錄

本誌第二十八卷總目錄

マルサスの恐慌論 (三・完)

谷口吉彦

緒論

一、マルサスに於ける人口論と經濟學との關係
二、マルサス經濟學に於ける恐慌論の地位

本論

三、生産動蕩論(一般的恐慌の肯定)
四、分配動蕩論(一般的恐慌の否定) (以上前號掲載)
五、一般恐慌論の現實への適用 (以下本號掲載)

結論

六、總括及び評論

五 一般恐慌論の現實への適用

以上恐慌の一般的理論に關する彼れの所論を詳述した。然るに『理論と經驗』(theory and experience)は彼れの隨所に繰返す所であり、經濟諸原理の研究と共に、『それが實際的適用に對する見解』¹⁾を明らかにすることは、彼れの意識的な企圖であつた。従つて吾々の問題も亦、『以上述ぶる諸原理の或もの、適用』²⁾として、恐慌に關する現實の研究を包含することゝなつた。即ちそれは『一八一五年以後の勞働階級の困難』³⁾に關する問題として、彼れの『原論』を結末づける所のも

1) 彼れの『經濟原論』標題の添書。

2) ibid., p. 490.

3) ibid., p. 490.

のである。而して一八一五年及び其の後の恐慌に就ては、吾々の既に検討したる所であり、リカアドウの注意を惹いたのも主として此の恐慌以後のものであつた。⁴⁾吾々は先づ此の現實の問題をば、自己の恐慌論の適用として意識的に取扱つたマルサスに對して、特殊の興味を覺えるものである。

第一、現實の恐慌と資本蓄積との關係

當時の恐慌及び之に伴ふ勞働階級の窮迫は、資本の缺乏に基くものであるとの説がある。謂ふ所は勞働人口に比較しての資本の缺乏であり、そのため勞働階級の失業と窮迫を惹き起してゐるといふにある。然るにマルサスに従へば人口に對する資本の缺乏と需要に對する資本の缺乏とは峻別さるべきものである。『兩者は共に勞働階級の間に困難を齎すから、二つの場合は屢々混同される。が併し是等は本質的に區別される。兩者は極めて異なる徴候を伴ひ、従つて極めて異なる方法で取扱はるゝことを要する。』⁵⁾第一に一國の資本を急激に外國に輸出したとせよ、商品生産は減少するに反し需要には變動がないから、商品の價值は騰貴して利潤を増加し、蓄積を刺激して資本減少は急速に回復する。此の場合に於ける『兆候』は、利潤の高きことによつて資本需要の存在を表示せる點にあり、之に對する『取扱』は蓄積の奨励にある。然るに第二に一國の資本が恐慌による破産のために減少した場合には、需要の缺乏により商品は下落して利潤を減じ、資本は需要に對して過剰となる。此の場合に蓄積を奨励することは、却つて資本家階級の困難を加重するものである。

4) 拙稿；『リカアドウの恐慌論(上)』、(經濟論叢 第二十八卷 第一號、昭和四年一月)。

5) 拙稿；同上(下)、(經濟論叢 第二十八卷 第二號、昭和四年二月)。

6) *ibid.*, pp. 490-491.

然らばイギリス當時の状態は此の二つの場合の何れに屬するか？ 疑もなく其れは後者に近似

する。第一に戦争のための『政府による莫大な資本の消耗』⁷⁾、第二に戦争終結に伴ふ『極めて異常なる需要の沈滞』⁸⁾、之に伴ふ私的資本の消耗、第三に此の沈滞の結果たる利潤及び地代の減少による需要の減退、第四に戦争に刺激された人口増加と軍隊解除による勞働供給の過剩、是等多くの原因のために、資本は減損せるに拘らず需要に對して過剩となり、生産は減少せるに拘らず有效需要に對しては商品過剩を呈し、勞賃は低下せるに拘らず失業者は増してゐる。其の特徴的兆候は資本の過剩、利潤の低下となつて表れて居る。此の如き狀勢の下に於て、『節約を奨励し、より大なる収入の資本への轉化を奨励するは、經濟學の原理に反しないか？ 其の總ての原理中の第一の最大の最も普遍的の原理——需要供給の原理——に對して、無益に徒らに反對するものではないか？ それは國民が餓死し移住しつゝある時に結婚を奨励すると恰も同じ事ではないか？』⁹⁾要するに此の恐慌は資本の絶對的缺乏によるよりも寧ろ其の相對的過剩に基くものである。

然るに又この困難は、耕作限界の低下、商業の制限、租税の重課等の諸原因に歸せらるゝ。今
是等が其の一般的傾向に於て、富の進歩に不利なることには異論はない。併し乍ら問題は現實の
説明にある。いま現實に當面せる困難に對しては、是等は何等の説明を與ふるものではない。何
となれば是等の諸原因が最も強力に作用した戦時中は、却つて最も急速に國富の増進した時期で
あつた。平和の回復によつて、『最も貧弱な土地は耕作から棄てられた後に、平和が多くの商業上
の制限を取去つた後に、……千七百萬の租税が國民から輕減された後に、吾々は甚だしい困難

7) ibid., p. 493.

8) ibid., p. 493.

9) ibid., p. 495.

と殆んど耐ゆべからざる壓迫を経験してゐるのである。¹⁰⁾それ故に『吾々は此の現在の困難の直接の原因は、之を他の何物かに求めねばならぬ』¹¹⁾然らば其は何處に求むべきか？『戦争以來一般に感ぜられ歎かれてゐる沈滞は、余の見るところでは、生産力を以つて富の唯一の要素と考へ、従つて若し生産力さへ増加すれば之に比例して富も増加すべしと推論する人々の理論に據つては、説明されない』¹²⁾何となれば社會的生産力は戦争の終結と共に解放せられ、増加せる資本と勞働が其の使用を待ちつゝある其の瞬間に、沈滞を惹起してゐるからである。此のことは即ち『富の永續的增加にとつては、生産力の増加以外に、他の何物かを必要とすることを明らかに示す』¹³⁾ものでなくて何であらう。

第二、現實の恐慌原因

資本の缺乏其他が恐慌の現實的原因たり得ること此の如しとせば、其は何處に求めらるゝか？他の論者は又、其れは戦争から平和への過渡によつて惹き起された經濟的攪亂——生産部門の均衡の一時的破壊——に基くものであり、資本が新たに變化したる事情に適應して、『其の過剰なる事業より不足なる事業へ移動し、適當なる均衡を回復する』¹⁴⁾ための困難より來る一時的攪亂であると考へる。吾々は曩にリカアドウの『部分的恐慌の原因』¹⁵⁾を論じたる際、彼れが此の説の代表者なることを明らかにした。これに對するマルサスの反對は、第一に新事情に適應するための資本の移動は、『戦後以來今日までに經過したほどのそんなに長い期間(約五年)を必要とするとは信ぜられない。……産業部門に必要な變化は、一二年の間に行はるゝであらう』¹⁶⁾といふこ

10) ibid., p. 496.

11) ibid., p. 496.

12) ibid., p. 498.

13) ibid., p. 498.

14) ibid., p. 499.

と、第二に『此の説に従へば多數に存在する筈の資本の不足せる事業、そして極めて多數の種の産業部門に亘つて歐洲の市場を明らかに供給過剰ならしめてゐる總ての過剰資本を十分に吸収し得る事業、そんな事業は何處に存在するか？』¹⁷⁾といふにある。

かくしてマルサスに於ては、戦争から平和への推移は此の恐慌の原因には相違ないが、併しそれは決して資本移動の困難を惹起したためではなくて、『消費及び需要の全量の大なる減少』¹⁸⁾を惹起したからである。『産業部門に必要な變化は、一二年の間に行はれるであらう、併し此の如き戦争から平和への過渡によつて惹起された消費及び需要の一般的減少は、極めて永き期間に亘つて繼續し得る』¹⁹⁾のである。何故かと言ふに此種の需要減退は、第一次的には政府支出の減少により、第二次的には民間支出の減少により、更に國際的に一般的な減少を示せるからである。尙ほ彼れの謂ふ所の消費及び需要の減退に就て注意すべき二三の點を指摘せねばならぬ。

第一に、謂ふ所の消費及び需要の減少とは、其の『全量の大なる減少』であり、『一般的減少』であつて、特定商品に對する部分的消費の減少でもなく、特定の生産部門に關する特殊需要の減退でもない。吾々は曩にリカアドウに於ける需要方向の變動が、彼れの部分的恐慌論に關聯することを見た。今マルサスに於ける需要の一般的減少が、彼れの一般的恐慌論に關聯することを發見して、興味を感じざるを得ない。

第二に、謂ふ所の消費及び需要の減少とは、常に生産及び供給に對する相對的減少を意味する。このことから更に二つの結果を生ずる。第一は此の恐慌の特殊性と彼れの考ふるもの。平和

15) 拙稿；『リカアドウの恐慌論(下)』(經濟論叢 第二十八卷 第二號 八一——八六頁)
16) ibid., p. 499.
17) ibid., p. 499.
18) ibid., p. 499.

の回復が常に恐慌を伴はねばならぬものとせば、其は不幸なる皮肉である。彼れに従へば其は必ずしも然らず、從來の諸戦争の終結は必ずしも今日の如き困難を伴つてゐない。這回の戦争に於て特に著しく平和と恐慌の随伴せるは、『最近の戦争に随伴せる極めて特殊な諸事情に據る』ものである。然らば其の特殊事情とは何か？ 吾々は曩に當時の恐慌の史實的考證をなしたる際、それ等が戦争の勃發、進展、終結と關聯することは疑ないが、同時に又、當時に於ける資本主義生産力の飛躍的發展に負ふ所大なることを明らかにした⁽²¹⁾。今マルサスが此の戦争に伴ふ特殊事情と稱するものは、即ち此の戦時中に於ける資本主義生産力の異常なる發展に外ならぬ。此の異常なる生産力と對比しての消費及び需要の減退、これが即ち此の恐慌の原因に外ならぬのである。『支出の急激に大減少した場合、資本家及び労働者によつて感ぜられる困難は、恰も此の生産力に比例し、また資本の急速な蓄積と相俟つて莫大な消費が供給された其の容易さに比例するであらう』⁽²²⁾と。

消費及び需要の減少が相對的であることの第二の結果として、各國に於ける此の恐慌の強度は、戦争による損害に反比例する。戦禍大なりし國は却つて恐慌による損害少なく、戦禍小なりし國は却つて恐慌による打撃大なりしと言ふ。『一般に……原則として設定せらるゝことは、戦争によつて最も多く苦しんだ諸國は、平和によつて最も少なく苦しんだ』⁽²³⁾何故かといふに、戦争損害の大なりし國に於ては、生産力は戦時中に於て増大し得ず、却つて減退さへする故に、戦後の需要減退は何等の苦痛とならず却つて好都合である。之に反して戦時中に異常な生産力を

19) ibid., p. 499.

20) ibid., p. 501.

21) 拙稿；前掲(上)參照(經濟論叢第二十八卷第一號、昭和四年一月)

22) ibid., p. 502.

23) ibid., p. 500.

發展せしめ、資本の蓄積を著しく増大した國家に於ては、平和回復に伴ふ需要の減退は、甚だしき打撃とならざるを得ない。而して彼れに従へば、『イギリスとアメリカとは此の後の種類の國に近い。彼等は戦争によつて最も少く苦しみ、若くは寧ろ戦争によつて富を増した。而して彼等は今や平和によつて最も甚だしく苦んで居る』²⁴⁾のである。

第三、現實の恐慌對策

此の如くして彼れは、資本不足説を排して資本過剰説を主張し、需要變動説に對して需要減退説を主張した。その必然の結果として、恐慌對策としての蓄積獎勵策を斥け、生産獎勵策よりも寧ろ消費獎勵策を主張する。吾々は曩に彼れの恐慌に關する一般的理論が、恐慌の成立を論ずる生産論と其の否定を論ずる分配論より成ることを見た。そして彼れの恐慌否定論は、富の分配に貢獻することによつて其の價值を増加する所の三原因——財産の分割、商業の擴張及び不生産的消費者の存在——に關するものであつた。従つて今現實に存在する恐慌を除かんとする彼れの對策は、必然に此の分配上の三原因に關聯せねばならぬ。此の中、土地財産の分割と商業の擴張に關しては、彼れも明確に徹底したる對策を掲げてゐない。土地財産の分割に直接干涉するが如きは、彼れの賛成し得る所でない。財産分割に關聯して國債處分の問題を論ずるが、此點に於ても彼れの主張は明確でない。たゞ國債は『財産の分割及び中産社會階級の増加を作り出す』²⁵⁾と做す彼のの見解よりすれば、其の急激なる償還に賛成し得る筈はない。商業の擴張、外國貿易の問題に就ては、彼れは一般的には自由貿易を主張するも、當時問題となつた穀物條例に賛成し、其他の

24) *ibid.*, p. 501.

25) *ibid.*, p. 507.

制限に就ても漸進主義を主張するから、現實の恐慌對策としては、茲でも彼れの主張は明確でない。

最も注意すべきは第三の不生産的消費の問題であらう。個々の私人に就いては、『不生産的労働の結果に關する眞理を十分に知り、富の増進を妨ぐべきものを目標とせず、之を増進すると考へらるゝものを宣傳し、』²⁰⁾其の能力に應じて不生産的労働を維持すべきは勿論、之を國家の政策的見地よりすれば、労働者を使用して而も直接に生産物の増加を來さるゝが如き事業、例へば道路・運河等の公共事業を起すべきことを主張する。此の種の事業が生産的資本の減退を惹き起すとの反對論は、今は問題でない。何となれば今の場合この事が恰も要求されてゐるのであるから。たゞ問題は、『それが労働に對する國民的需要の減退を除くに隱蔽し、人口が其の減少したる需要に自らを適合させることを妨げる結果となる』²¹⁾點にある。それ故に此の如き場合には、寧ろ低き勞賃を支給することによつて、此の弊を防がねばならぬといふ。此の如くして『道路其他の公共事業に貧民を使用すること、並びに地主及び有産者の間に於ける土地を建設し改善し美化し又職人及び僕婢を雇傭せんとする傾向、此の兩者が生産消費の均衡攪亂より起る害惡を救済する上に、最も吾々の能力の範圍内にあり、且つ最も直接に與へらるゝ對策である』²²⁾

要するに分配上の三原因の作用により、生産と消費、供給と需要との均衡を回復せしむることによつて、生産物の全價值を高め、從つて利潤を高めねばならぬ。資本家は茲で始めて健實な高い利潤から——支出の削減からでなく——其の資本を蓄積することが出来る。『吾々は此の時始

20) *ibid.*, p. 511.21) *ibid.*, p. 511.22) *ibid.*, p. 512.

めて、節約の普通の過程——増加した収入の一部を資本に追加する所の過程——によつて、吾々の損失せる資本を安全有效に回復することが出来る』²⁹⁾のである。

六 總括及び評論

第一、總括

以上述ぶる所によりて明らかなる如く、マルサスの恐慌論は、普通に解せらるゝが如き絶對的肯定論でもなく、また恐慌必然論でもない。恐慌は資本主義組織の下に於て不可避免的な、必然的現象であるとなすが如きは、當時の社會的存在に於て、また古典學派に共通な根柢に立つマルサスに於て、考へ得べからざる所である。彼れの恐慌論は言はゞ相對的恐慌論であり、或る條件の下に於ける恐慌の成立を肯定し、また現實に存在する恐慌を卒直に認識しようとするに過ぎない。けれども是れだけで既にリカアドウの否定論に對立するに十分であつた。併し乍ら吾々の既に見たるが如く、リカアドウ以下の否定論も亦、絶對的に之を否定するものではなかつた。彼等の否定は一般的恐慌の否定に過ぎず、部分的恐慌の偶然的發生は、之を拒否するものではない。それ故にマルサス恐慌論の特徴は、第一にリカアドウ以下の偶然的部分的恐慌論の對立物として、第二に後の學者の絶對的又は必然的一般的恐慌論の對立物として、前者より後者への發展を連絡する一の連環としての相對的一般的恐慌論を成す點にある。前者の發展としてのマルサスは、部分的より一般的へ、偶然性より相對性への發展であり、後者へ發展すべきモメントとしては、絶對

性への過程としての相對性を示すことゝなつた。換言せば恐慌の一般性を認識することによつて前者に對し、其の相對性を主張することによつて後者に對して、彼れ自身を特徴づけるものである。以下重ねて此の二點を明らかにしたる後、之に對する評論を試むることゝする。

(一) 恐慌の一般性。マルサスに於ける生産過剰は、特殊の商品又は特定の生産部門に限らるゝものにあらず、主要なる生産部門の大部分に亘る一般的生产過剰である。其の論據の第一は、かゝる生産過剰が需要の一般的減少に基くどされてゐる點にある。社會的購買力の一般的減少に基く生産過剰は、一般的たらざるを得ないことは自明であらう。此點に於て彼れはかの需要方向の變動を強調する部分的恐慌論に對立する。一般的恐慌の第二の論據は、物々交換を斥くる物勞交換説にある。彼れは部分的恐慌論者の主要な論據となつた物々交換説が現實の事實に即せざることゝ難じて、大部分の商品が勞働に對して交換せらるゝことを主張する。此の主張は常に消費者との關係に於て商品を観察する彼れに於て當然のことなるが、彼れに従へば、勞働者の消費及び需要は、蓄積の行はるゝ場合にも増加しない。従つて増加したる商品生産に對しては、之と交換さるべき勞働の相對的不足を來し、茲に生産は過剰とならざるを得ない。第一の根據となれる需要の一般的減少は、戰爭より平和への過渡によつて惹き起されたる現實的特殊な恐慌原因であるに對し、第二の根據は資本の蓄積に伴ふ一般的傾向である。何れにせよ此の一般性によつて彼れは、一方に部分的恐慌論に對立し、他方に一般的必然論への過渡をなすことゝなつたのである。

(二) 恐慌の相對性。富の分量を増加する生産上の三原因は、それだけでは其の價值を増加せず、從つて正にそのために、分量の増加そのものも亦行き詰らざるを得ない。之を資本の蓄積に就て見れば、其れは一方に生産の分量を増加すると共に、他方に社會的需要の減少を來し、價格の下落と利潤の低下を惹起して蓄積の動機は沮害せられ、生産は行き詰る。即ち生産力の發展は、たゞそれだけでは必然に生産過剰に導かねばならぬ。これ彼れの恐慌肯定論である。然るにすでにこれに依つて明らかなる如く、かゝる一般的恐慌の成立は、たゞ一定條件の下にのみ、即ち生産上の諸原因のみ作用すると考へたる場合に限り、可能であるに過ぎない。今若し富の價值を増進する諸原因によつて、分量の増加と同時に其の價值を増進し得るならば、生産の増加は過剰を來すことなくして、永久に進行し得べしとなす。即ち恐慌の成立は富の分配を考ふることによつて否定せられ、同時に現實の恐慌も亦分配政策によつて之を防ぎ得ることとなる。かくして彼れに於ける生産動態論は恐慌の肯定乃至成立を論じ、分配動態論は其の否定乃至消滅を論ずることとなる。吾々が相對的恐慌論と呼ぶ所以は茲にある。此の相對性によつて一方にリカルドウ以下の偶然性と對立し、他方に後の學者の絕對性又は必然性への過渡を示すことゝなつたものである。

第二、評論

先づ第一に恐慌の一般性に關する彼れの所論を吟味する。吾々は既に當時の恐慌が可なりの程度に一般化されたものであり、且つ既に當時の程度に發展せる資本主義に於ては、其の恐慌は決

して特定の企業若くは特殊の生産部門に留り得ざるものなることを論證した。今マルサスが理論的且つ實證的に其の一般性を主張せる點は、かの部分的恐慌論者に比して一段の發展を示せるものと言はねばならぬ。殊に當時の一般的恐慌が、資本主義の初期に於ける生産力の飛躍的發展と、戦争終結に伴ふ需要の一般的減少に基くことを主張せるは、正當なる理論と觀察の上に立つものと認めねばならぬ。

たゞ第二の論據をなす一般的理論に於ける此點の論證は、未だ十分とは見られない。物々交換説に對する物勞交換説は、商品をつたひ商品相互の關係に於てゝなく商品對消費者との關係に於て觀察せんとする努力に關する限り全く正當であるとしても、それが現實の事實に即せずとの彼れ自身の非難は、物勞交換説に對してのみ免れ得るかは疑問であらう。假りに此點を看過するとしても、此の物勞交換説を根據として一般的恐慌を導き出せる彼れの推論は果して正しいかどうか？ 彼れの假定によれば、収入の一部を資本に轉化したる場合も、勞働者全體の消費及び需要は之によつて毫も増加せず、從つて増加したる『商品の大量は、其れが交換さるべき勞働に比較して供給過剰となる』といふにあるが、言ふまでもなく商品と交換さるべき勞働は、單なる勞働にあらずして、資本家に需要されたる勞働、若くは購買力を有する勞働、換言せば勞働者の購買力に外ならぬ。然らば勞働者の購買力が資本の蓄積、生産の擴張によつて毫も増加せずとなすは果して正しいか？ 生産の擴張に伴ふ勞働需要の増加するに從つて、既存の勞働者の個々の購買力を増加し、同時に購買力を有する勞働者數の増加あることは、彼れも他の個所に於て認むる所

1) 拙稿；『リカアドウの恐慌論』（前掲）参照。

2) T. R. Malthus; Principles of Political Economy (1820), p. 353.

である。従つて正當には資本の蓄積と共に勞働者全體の購買力も増加するものとせねばならぬ。此の場合に物價騰貴の傾向が勞賃騰貴の傾向よりも強き時は、個々の勞働者の購買力は却つて減少すべきも、而も全體としての購買力は必ずしも此の事實から判斷することを許さないであらう。此の場合の問題は寧ろ、資本蓄積による生産物の増加と、蓄積に伴ふ全勞働者の購買力増加との比例如何であらう。後に至つて論ぜらるゝ如く、資本構成の高級化するに従つて、勞働投資に對する資本投資の比例を増し、勞働者購買力の相對的減少を來すならば、茲に消費不足説の餘地を残すこととなるが、マルサスに於ては消費不足は寧ろ資本家側に起ることとなる。即ち彼れに於ては、蓄積と節約と禁欲とが必然的に不可離のものとしてゐる。固より資本主義の成立に當つて禁欲乃至節約が資本蓄積に對して演じた役割を看過することは正當でない。従つて古典學派若くは之に先だつ經濟論者が、節約と蓄積を同義にまで見たことには一應の理由を認めねばならぬ。けれども既に資本が資本主義の組織内に其の増殖運動を開始した後は、資本の蓄積増殖は必ずしも節約若くは禁欲と不可離には存しない。資本家はたゞ其の從來の生活程度にさへ満足し得るならば、それが如何に禁欲節約とは縁遠いものであつても、蓄積は大なる程度に進行し得べく、更に其の贅澤の程度を遞増したとしても、其の比率が資本増殖率に及ばざる限りは、増殖運動は限りなく進行するであらう。それ故に資本の蓄積ある毎に之に比例する資本家消費の絕對的減少あるものとなし、之によつて生産過剩を結論するは正當であるとは思はれぬ。

第二に恐慌の相對性に關する彼れの所論を吟味する。茲に於ける根本の問題は、彼れの價值論

並びに之に關聯する分配論でなければならぬ。彼れの價值論を根本的に論評するは當面の問題でない。たゞ茲では彼れの謂ふ所の價值は、リカアドウ以下の勞働價值とは異り、交換價值・自然價格・必要價格若くは生産費價格と呼ばるゝものに類する下位範疇に屬する。吾々は先づ此の前提に立つ。他の機會に述ぶるが如く、彼れどリカアドウとの間に於ける終生の論争は、論點多岐に亘るけれども、其の主要問題は主として價值論と恐慌論に關し、後者は又根本的には各々の價值論上の相違に關聯する多きものなるが、彼等は相互に自らの價值概念を以つて相手のそれをも律せんとする傾きを有し、未だ相手の概念そのものを根本的に分析せんとする努力を拂はない。かくて論争は終世に亘つて盡きず、而もそれによつて、彼等の各々も吾が經濟學も、幾何の發展を待ち得たかさへ疑問とされてゐる。今吾々は假りにマルサスの概念する價值の上に立つ。彼れは當然に其の價值が需給關係によつて決定さるゝを主張する。然るに他方に於て彼れは、價值は専ら需要によつて決定せられ、社會的欲望への適合に依存することを高調し、主觀的傾向を帶ぶることが強くなつて來る。このことから『價值は主として分配に依存する』こととなる。價值が分配に依存するとは、それが欲望乃至需要への適合に依存することを意味し、從つて供給側の事情如何は多く顧みられざることとなる。彼れは需給原則を以つて、『總ての原理中の第一の最大の最も普遍的の原理』となし、最高の權威を之に認めながら、また價值論への其の適用を主張し乍ら、古典學派に殆んど共通の自然價格説又は生産費價格説を顧みること少く、價格變動による生産の自然的調節の代りに、分配政策による價格維持從つて生産維持を主張する。これ彼れの價值論に

3) *ibid.*4) *ibid.*, p. 495.

内在する一の難點であると共に、その分配論從つて相對的恐慌説の根柢に横たはる一の弱點をなすものであらう。

彼れに於ける特殊の分配は、商品價値の維持のために必要なる過程として存在する。茲では彼れの價値は、生産の自然的調節者として働く生産費價格としてなく、分配手段による需要の永續的確保によつて生産の永續的擴張を保證する刺激として働く。商品の消費者への分配を意味する彼れの分配論は、一方に於て商品を常にその消費者との關係に於て考察せしめ、供給と需要、生産と消費との相對的考察に導く功績を與へて、彼をしてよく一般的生産過剰の認識に至らしむるの効果あると共に、他方に於て固有の意味に於ける分配——收入又は所謂の分配——を看過せしむるに至る。蓋し地主・資本家・勞働者の三階級が各々所得する所の地代・利潤・勞賃の相互關係は、スミスに於ては價格の構成部分として、リカードウに於ては獨立の分配問題として、特別の注意を惹いて來たものである。此の意味に於ける分配は、一方に各階級の生活資源として殊に勞働階級の生活程度の決定要素たると共に、他方に於て購買力資源として殊に資本家階級の生産擴張に關係する。リカードウに於ける分配論は主として此の前者に偏し、購買力としての生産活動の刺激に對しては多く注意するに至らず、茲に一般的恐慌を否定するに至つたのであるが、マルサスの動態論に於ては此の固有の分配論は殆んど看過さるゝ故に、生産刺激としての勞働階級の購買力は多く問題とされず、消費若くは需要に關する彼れの關心は寧ろ資本家階級に關する。例へば資本蓄積に伴ふ過剰生産は資本家消費の絶對的減少を主因とし、分配論に於ける財産分割

及び不生産的消費も主として資本家消費の増加に關係する。彼れの分配論が消費者階級への商品分配に止り、更に進んで此の消費者の大部分を占むる勞働階級の購買力如何の問題が、彼れに於て多く問題とされず、茲に消費不足説を發展せしむる餘地を残すことゝなつたのは、此の意味に於て當然の歸結ではあるが、同時に又彼れの特殊の分配論が他方に包含した難點——所得分配の看過——に由來するものと言はねばならぬ。

彼れの特殊な分配論の内容そのものも亦注意に値する。財産の分割がますます平等となり、各人の購買力の生産に對する發言權が平等となるに従つて、資本主義の社會に存する社會的需要と社會的必要との背反は次第に緩和さるべく、此の意味に於て彼れの謂ふ所の分配が、財産の分割に依存するとなすは正當である。たゞ謂ふ所の財産分割は主として土地財産の分割であり、精々のごころ商工階級を包含するに過ぎない。是等の階級と勞働階級との間に於ける所得の分割を問題としない彼れの財産分割説が、現實の恐慌對策として何等明確な暗示を與へ得なかつたのは、蓋し當然の歸結であらう。商業の擴張殊に海外市場の開拓が、商品の流通を擴張して其の價値を實現せしめ、生産過剰を防ぎ得るとの主張も亦その限り正當である。此點に於て彼れは、後期資本主義の海外市場の爭奪戰を暗示するかの感がある。たゞ彼れの極端なる地主擁護説に制肘されて、現實の恐慌對策としての貿易論は、亦甚だしく不徹底のものとならざるを得なかつた。最後に不生産的消費者の必要を高調せる彼れの主張は、浪費を奨勵するものとして當時の非難を免れざりしものなるが、恐慌又は不景氣の救済策として政府の公共事業を起すべきことは、其後多く

の人々によつて支持され又實行さるゝ所である。たゞ彼れの主調は、かゝる手段による労働者の失業救済よりも、寧ろ地主資本家の所得に寄食する不生産者の増加、又は租税寄食者の増加による需要の喚起にあるかの感がある。然る限り彼等の生活資源は結局に於て利潤又は地代に歸し、それだけ蓄積の動機を阻害せねばならぬ。それ故に彼れが富の増進を永久に保證すると考ふる此種の階級の不生産的消費も亦、結局に於て富の生産を直接に壓迫する結果に歸するものゝ様である。

最後に彼れの蓄積論を吟味する。第一に資本の蓄積は彼れに於ても亦正當に收入から資本への轉化である。たゞ此の轉化されたる資本部分が、如何なる對象に投下さるゝかの重要な問題に於て、彼れはリカアドウと同じく古典學派に共通の誤謬に陷る。リカアドウに於てはそれは總て勞働需要となりて表れ、延いて勞働階級の商品需要となり、生産擴張は即ち需要擴張となつて生産過剰は否定されたのであつたが、マルサスに於てはそれは生産的勞働に對する需要の増加とはなるが、併し全勞働階級の商品需要は其のために増加せず、從つて生産過剰は肯定さるゝことゝなる。此の場合に於ける兩者に共通の難點は、生産手段を全く看過する點にある。資本に轉化さるゝ蓄積部分は、少くとも其の一部は固定資本及び流動資本として投資されねばならず、且つ此の部分は資本主義の發展すると共に、資本構成の高級化すると共に、其の割合を増加せねばならぬ。それ故に蓄積部分の總てが生産的勞働に對する需要として表はるゝが如きことは一般的にはあり得ないと言はねばならぬ。併も亦勞働階級の商品需要には少しの増加も起らずとするマルサ

スは、リカアドウとは反對の誤謬に陥つたものであり、更に此の場合の蓄積が、資本家消費の絶對的減少を意味するが如く考ふることも正しくはない。かくして蓄積に關するマルサスの難點は、三重に存在するかに思はれる。第二に蓄積の極限に關するマルサスの觀察は、リカアドウとの關係に於て注意に値する。リカアドウに於ては利潤率遞減の法則から演繹されて、蓄積の極限——擴張生産の行詰り——は何時かは、恐らくは遠き未來に於て、到來せねばならぬことになる。併も此の状態に達した社會は決して沈滞又は恐慌の如き悲觀的狀態にあるものではなく、反對にそれは理想的靜止狀態であつた。然るにマルサスに於ては、蓄積の極限は此の如き一回限りの歴史的發展の極致ではなく、繰返し現實に起り來る所の沈滞又は恐慌である。現に當面せる當時の恐慌は、即ち此の蓄積の極限に當面せるものである。此の意味に於てベルグマンがリカアドウの蓄積の極限を述べたる事實を引用したる後、『茲にリカアドウの述べてゐる事實は、恰もマルサスが其の生産過剩説を出發せしめた事實と同一である』と言へるは正當である。第三に以上の結果として現實の問題としての蓄積の極限——生産擴張の行詰り——は、リカアドウに於ては否定せられ、マルサスに於ては率直に認識せられ勇敢に肯定せらるゝのみならず、それはまた人口法則と相並んで一の自然法則として君臨する。恰も勞働階級の貧窮が、人口法則の結果として、然に存在せねばならぬと同じく、恐慌は資本法則の自然の結果として、資本家階級の免るべからざる運命である。たゞ貧窮が道德的抑制によつて緩和せらるゝと同じく、恐慌も亦分配政策によつて或程度に緩和され若くは免れ得ると言ふに過ぎない。(完)

5) E. Bergmann; Geschichte der nationalökonomischen Krisentheorien (1895), S. 94.